

江田島を憶う 2008. 9. 22

江田島を去ってからはや70年、今も私の中には兵学校の教育が脈々として生きている。私を生んだのは父母、育てたのは江田島と言っても過言ではない。

その教育とは何であったか。戦後日本の教育とはまさに対極にあったといえるのではないか。人間のやることに万全ということはない。いずれにも利点もあれば、欠点もある。しかし今日の目を覆うばかりの道義の退廃を見ると、江田島の教育はよかった、あの教育を受けたことは一生の幸せであったとの思いを新たにするのである。

その第一は奉仕の精神である。国家国民への奉仕、海軍や部隊への奉仕、同僚、部下への奉仕。その奉仕には限界や留保はなかった。

私が入校して数日たった頃、ある指導官が全員に対して、こういうことを訓示した「お前たちはいろいろの動機で入ってきただろう、遠航に行きたい、短剣を吊って良い格好をしたい、中には大臣大将になりたいという人もおるだろう、そんなことは今すぐ忘れてしまえ、そして太平洋の藻くずとなると覚悟せよ」。これを聞いて、たいした動機もなく友人の勧めのままに入った私は、大変なところに来たものだと思った。多忙な毎日に紛れて深刻に考えることもなかったが、卒業する頃には十分には言えなくとも、職務に殉じる覚悟だけはあつていた。それには次のような事情もあつた。

入校した次の年に支那事変が始まり、ごく近い先輩も陸戦隊として上海の戦場で戦死されたことも伝わってきた。観念的であつた「太平洋の藻くず」がにわかになつたのである。卒業すれば部下を持つ。その部下の前で見苦しくない死に方ができるか、全く自信はなかった。

事変が一段落すると、陸戦隊、艦艇、それに航空部隊からも歴戦の方が教官に着任され、生徒に経験談を話された。その中でもっとも印象深く覚えているのは「内田少尉は平素は大きな声も出さず、これで戦ができるかと思つていたが、ふたを開けたら一番勇敢だつたのは内田少尉であつた。いざというとき一番頼りになるのは、大言壮語する人ではなくて平素から黙々として誠実に職務に励む人である」と。（後に海幕長になられた内田一臣さん若い日の逸話である）

やがて最上級生になつたある日、勇名を馳せられたパイロットの官舎を訪問して「教官、怖くはありませんでしたか」と問うた。「それは怖いさ。しかしなア、やる事が多くて怖がつている暇はなかつたよ」との返事であつた。これらのことから、私は真剣に自分に与えられた職務に没頭すればよいのだ。それなら自分にもできる、と思ひ定めて卒業した。佐久間艇長の事蹟に大きく感動し後に続こうと思つたことなども大きく作用してつたことはもちろんである。そして数々の戦場に参加し、それがけつして間違つてつなつたことを知つたのである。

ついでながら、この例のように、兵学校の教育は理屈を説くのではなく、恵まれた自然の環境のなか、教育参考館をはじめ講話や伝記などで示される、立派な先輩や烈士の事蹟から自ら学び、また日常生活や多くの学校行事を通じて、身につけさせるのか主眼であつた。入校当初ひとりが失敗すると、分隊の同級生全員が鉄拳修正を受けたことは、同級生の相互支援だけでなく一体感や連帯感を培う良い資ともなつた。同じ目標を持ち、厳しい試練をともにすることから、自然に培われた友情は、卒業までには生死を共にする「同期の桜」して、生涯変わらぬ団結までに発展した。

奉仕の精神とともに重視されたのは廉恥心であり、自律心であつた。責任逃れは風上にも置けないものとされ、いいわけは一切許されなかつた。

「――をしたものは集まれ」と言われると、鉄拳が待っていることは分明ながら、したかどうか、忘れたものまでやつてきた。陰日向のあること、同僚を出し抜いて自分だけが良い子になろうとすることなどは唾棄された。自分で計算して伝票を書き、あるいは現金をお盆に置いてくる酒保やクラブの勘定は、余つても足りないことはなかつた。破廉恥的行為は、海軍将校たるべきものにふさわしくないとして、直ちに生徒罷免につながつた。

しつけ教育が重視されたのはいうまでもない。その基本は海上で生活し戦う海軍将校になくはならぬものを、生徒生活を通じて徹底的に身につけさせることにあった。「スマートで目先が利いて几帳面、負けじ魂これぞ船乗り」五分前の徹底、服装容疑、身の回り、あるいは構内すべてについての清潔や整理整頓、敏捷で無駄なく垢抜けた動作、一刻の気の弛みも許されなかった。どんなに気を張っても最初からできるものではない。随所に最上級生徒の鉄拳が飛んだ。最初は驚異の眼で上級生徒を見た新入生も、半年もたたない間にいつしかこれらのしつけが一応は身についたのであった。

学術教育は、井上成美校長が喝破したように「丁稚教育ではなくて学士教育」であった。卒業してすぐ役に立つ教育ではなくて、長い海軍の勤務の基礎作りというわけである。私は4年の予定が3年4か月に短縮され、後の方で習う予定の発射法とか雷撃法といった水雷長には必須の課目はすべて未習で卒業した。卒業後2年余で駆逐艦水雷長を命じられ、開戦を控えて死にもものぐるいで勉強した。そのとき役に立ったのは、微積分とか公算学などの基礎知識であった。精神科学として教わった哲学の基礎的紹介は、長く自己啓発の動機となった。

前に述べたように兵学校の教育は全人的教育で、頭だけのものではなかった。最上級生徒になれば下級生特に新入生徒の指導を通じて統率の一端を学んだ。鉄拳はいじめではなくて愛の鞭であった、(体罰は当時の日本の一般的慣習であった)殴られても恨みに思うことはなく、良い後輩を育てようとする真情の通じることが多かった。それだけに卒業する最上級生徒を送るとき、新入生だった私は涙が止まらなかったことである。そして卒業後も相互の親愛の感情は長く続き、今日でも私にとって入校時最上級生徒(一号という)であった64期の方、自分が1号の時の新入生徒であった70期の人には、格別の親愛感があるのは否定できない。

滅びたものは美しい。私は兵学校を美化しすぎたかもしれない。しかし、さきに言ったように、ここで学んだことは私にとって一生の幸せであり、もしまだあるならば、なんとしても息子や孫の教育を託したいと思うことである。